氏　　名	横　山　昌　子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第 205 号
学位授与の日付	2016 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文の題目	現代中国語の使役構文の意味研究
論 文 審 査 委 員	主査　神奈川大学　教授　松　村　文　芳
	副査　神奈川大学　教授　彭　　国　躍
	副査　神奈川大学　准教授　加　藤　宏　紀
	副査　神田外語大学　准教授　布　川　雅　英
	副査　麗澤大学　准教授　温　　琳

【論文内容の要旨】

横山昌子氏の博士学位請求論文「現代中国語の使役構文の意味研究」について（1）研究の目的（2）考察の対象（3）論文の全体の構成（4）各章の内容について以下、順に述べる。

（1）　研究の目的

「使役」はヴォイス現象の一つであるが、中国語文法では「使役」は「受け身」等とともに独立した文法事項として取り扱われていない。しかしヴォイスを話者の視点による意味的な現象として捉えると、ヴォイス現象はどの言語にも存在し、従って中国語にも「使役」や「受け身」を表す形式がある。

中国語の文法研究において「使役」と形式を結び付けた最初の研究者は王力で「動詞―結果補語構造」を「使成式（＝使役形）」と名付けた。趙元任（1968）は「兼語構造」の第一の動詞は「使役」タイプであると述べている。近年の研究では“得”構文、“把”構文の一部が「使役」の形式であることが明らかにされている。

このように中国語の「使役」には統語的に異なる形式が用いられているが、これらがともに「使役」の概念を表しうるのは共通の意味構造が存在すると推定されるからである。この論文は中国語の形式の異なる使役構文が共通の「使役」の意味構造を有することを解明することを目的とする。

（2）　考察の対象

現代中国語の使役構文にどのような形式を含めるかについては研究者によって見解が異なり、共通の認識となる規定が存在しない。本論文では①兼語構造を持つ文として“讓”構文、“使”構文、兼語文をとりあげ、②「動詞―結果補語（VR)」構造をとる文として VR 構文、“得”構文をとりあげて考察の対象としている。

（3）　論文の全体の構成

本論文は序論と結びを除き、全６章でなりたっている。第１章「中国語の使役文の先行研究と本論の捉え方」では範曉（2000）から松村（2011）までの先行研究を渉猟し、それぞれの研究に対する横山氏の見解を述べている。第２章「分析理論―形式意味論の考え方と方法」では、構成

性の原理、モデル理論意味論の概略、および論理構造の表記方法を記述している。第３章「兼語構造と VR 構造を基盤とした使役文」ではそれぞれの構文の意味構造を詳述している。第 4 章「VR の項整合と意味構造」では袁毓林（2001）の項整合の分析を横山氏自身の考えをもとに論理式で表記している。第 5 章「VR の特徴と論理構造」では VR 複合語を他動詞型と自動詞型に区分し、それぞれを論理式で表記して違いを明示している。第６章「モンタギュー意味論による使役文の分析」では R・モンタギューの PTQ の内包論理の記述方法を参考に統語的生成と意味的形式が厳密に対応することを記述している。

（4）各章の内容の詳細

第１章ではまず第一に 1.0 で「現代中国語の使役研究の概観」を述べ、1.1「使役概念からの研究」として、1.1.1 範暁（2000）、1.1.2 熊仲儒（2004）をとりあげ、続いて 1.1.3 で横山氏自身の「使役の捉え方」を三項函数として意味構造を捉えると明言する。第二に 1.2 で「“譲”、“叫”、“使”構文、兼語文の先行研究」として、1.2.1「王力（1943、1944）」、1.2.2「Chao（1968）」、1.2.3「朱徳熙（1982）」、1.2.4「温琳（2008）」を検討して、1.2.5 で横山氏自身の考えは温琳（2008）と同様に“譲”、“叫”、“使”構文の論理構造は三項函数であると考え、さらにそれを拡張した拡張三項函数であることを主張している。第三に 1.3「VR についての先行研究」の「1.3.1 先駆的研究」として 1.3.1.1 で王力（1943, 1944）を、1.3.1.2 で Chao（1968）をとりあげ、さらに 1.3.2「VR についての生成文法による研究」として、1.3.2.1 で「何元建（2011）を、1.3.2.2 で「Sybesma,R・沈陽（2006）」を詳述する。第四に「“得”構文、“把”構文の研究」として 1.4.1 で李臨定（2011）を、1.4.2 で松村（2011）をとりあげ、両者の主張を取り入れて、“得”構文が VR の拡張であること、“把”が授与函数を表すことを述べている。

第 2 章では本論文の理論的枠組みである形式意味論について、2.1 で形式意味論の基本的な考え方を、2.2 で形式意味論における意味規定の方法を、2.3 で中国語の使役文についてモデル理論的意味解釈の過程を記述している。最後に 2.4 でこの後の章で用いる論理式について詳述している。ここでは中国語の文の意味をより直観的にとらえることができるように、一般的な述語論理に談話概念、意味役割、時相の概念を導入している。

第 3 章では、3.0 で中国語は動詞の格変化がないためにヴォイスは文法的なカテゴリーに分類されていないが、「使役」の意を表す統語形式は様々なものが存在し、それらを意味構造を基準に分類すると「兼語構造を基盤とした使役文」と「動補構造を基盤とした使役文」になると主張する。そして 3.1 で「兼語構造を基盤とした使役文」について、3.1.1 で「兼語構造の特徴」を「単純使役義」と「多義使役義」に二分する。そのうえで 3.1.2 は「多義使役兼語文」を、3.1.3 は「単純使役兼語文」を詳細に論述している。3.2「動補構造（VR）を基盤とした使役文」については、3.2.1 で「VR+対象」の意味構造について「使役性を持つ「VR+対象」」と「使役性を持たない「VR＋対象」」に下位区分している。さらに 3.2.1.1 で「使役性を持つ「VR+対象」」の意味構造を、3.2.1.2 で「使役性を持たない「VR＋対象」」の意味構造について考察している。そして「VR+対象」と基本的に同じ使役構造を持つものとして一部の“得”構文をとらえ、それを 3.2.2 で「使役を表す“得”構文の意味構造」として記述している。

第 4 章ではまず 4.0 で VR 複合語が文法現象から見ると語彙的複合語ととらえることができるが、意味的には V と R が独立した述語として意味を構成していると考える。その考えにより袁毓林（2001）の配価理論を援用した「項整合」に着目し、項整合が意味構造においてどのように現れるかを論理式を示すことにより明示的に考察すると述べる。そのうえで 4.1 で袁毓林（2001）の分析を、4.2 で「VR の項整合と意味構造」を説明する。4.2 をさらに 4.2.1 併価タイプ、4.2.2 消価タイプ、4.2.3 共価タイプに下位区分して袁毓林（2001）の考えを論理式で表記して詳細に

説明している。

第5章では5.0でVR構文が構成する使役の論理構造を形式意味論の立場から分析することを明らかにし、5.1でVRの基本的特徴について、5.1.1で「VRの結合レベル」を、5.1.2で「VRの目的語」を、5.1.3で「VとRの動詞タイプ」を、5.1.4で「VRの使役義」に下位区分して明らかにしている。5.2では「VRの分類と論理構造」を、5.3で「他動型VRの論理構造」について述べ、5.3をさらに5.3.1対格タイプ、5.3.2能格/非対格タイプに下位区分して説明している。5.4で「自動型VRの論理構造」を、5.4.1自動詞の種類、5.4.2自動型VRの三つのタイプに下位区分し、5.4.2をさらに5.4.2.1非能格タイプの論理構造、5.4.2.2一項能格タイプの論理構造、5.4.2.3V←Rタイプの論理構造に下位区分して説明している。そのうえでさらに5.5で「動詞コピー形式のVR」を、5.6で受動者主語のVRについて考察している。

第6章では6.0の「はじめに」でR・モンタギューのPTQの枠組みに「語彙分解」の手法をとりいれて、範疇文法とタイプ理論に基づき、ラムダ演算を組み合わせた高階の述語論理を用いることを明言する。6.1では「モンタギュー意味論とPTQ」について、6.1.1形式意味論における論理言語、6.1.2PTQの基礎的枠組み、6.1.3構成性の原理、6.1.4内包と外延、6.1.5「意味公準について」の5項に下位区分して概説している。さらに6.2の統語規則と翻訳規則を6.2.1範疇と論理タイプ、6.2.2統語規則と意味規則に区分する。また6.2.2を6.2.2.1基本表現に関する規則、6.2.2.2「主語―述部」に関する規則、6.2.2.3他動詞に関する規則、6.2.2.4普通名詞の限定に関する規則、6.2.2.5等位接続に関する規則、6.2.2.6その他の規則に分けて詳細に説明している。

6.3で“譲（叫)”、“使”使役構文の意味分析を、6.3.1“譲”の範疇と翻訳、6.3.2追加の規則、6.3.3“譲”構文の分析、6.3.4“使”構文の分析に下位区分して考察している。6.4では多義使役構文の意味分析を、6.4.1多義使役構文の分類、6.4.2多義使役動詞の統語構造、6.4.3多義使役兼語文の論理分析に下位区分して説明している。6.4.3はさらに6.4.3.1「命令」「強制」を表す多義使役構文、6.4.3.2「請願」「依頼」を表す多義使役兼語文、6.4.3.3「催促」「提案」を表す多義使役兼語文、6.4.3.4「許可」「許容」を表す多義使役兼語文、6.4.3.5「禁止」「阻止」を表す多義使役兼語文に細分されて、それぞれの文の派生の過程が範疇文法による分析樹で示され、統語規則Ｓｎは対応する翻訳規則Ｔｎと組み合わされている。翻訳規則では分析樹にもとづき、ラムダ演算や中括弧規約、ダウン・アップ打消し、意味公準等の操作を経て使役文の論理式が形成される。この第6章はこれまでに詳述した中国語の使役の意味構造を高階の述語論理の技法を駆使して厳密に定式化したものである。

【論文審査の結果の要旨】

横山昌子氏の論文について実施された博士論文審査口頭試問委員会における審査委員各位の見解・評価ならびに質疑応答の内容を考慮し、次に論文審査の結果を述べる。当該論文が厖大な量を有することにより審査は第1章から第6章までに分け、それぞれの章について十分な質疑応答の時間を確保した。

第一に審査委員各位は横山昌子氏のこの論文が中国語の各種の使役文の意味構造を三項函数として捉えることに成功し、分析が洗練されているという肯定評価をあたえた。

第二に第1章の「先行研究と本論文の捉え方」では重要な先行研究を慎重に選択し、その成果を本論文に十分に生かしていることである。

第三に第 2 章の「分析理論――形式意味論の考え方と方法」では形式意味論の基本を明快に説明したうえで、論理式の表示における新しい提案、つまり「話題」「副話題」「意味役割」「時相」「着点」について自らの提案を行っていることである。

第四に第 3 章の「兼語構造と VR 構造を基盤とした使役文」ではそれまで指摘されることのなかった「兼語構造を基盤とした使役文」と「VR 構造を基盤とした使役文」の共通性を意味構造の三項函数表示により明らかにしたことである。

第五に第 4 章の「VR の項整合と意味構造」では配価理論をベースとした袁毓林（2001）の項整合の三種のタイプについてより厳密な論理式で表記し、詳細な説明を施したことである。

第六に第 5 章「VR の特徴と論理構造」において VR の論理構造を「他動型 VR の論理構造」と「自動型 VR の論理構造」に区分し、前者を二種のタイプに後者を三種のタイプに分けて独自の考え方を提示したことである。

第七に第 6 章「モンタギュー意味論による使役文の分析」では R・モンタギューの内包論理と D.Dowty の語彙分解の技法をベースに範疇文法とタイプ理論に基づき、ラムダ演算を用いて中国語の使役文の論理構造を明示することに成功したことである。

横山昌子氏の本論文の特徴は第一に各章が関連しながら記述されていることである。第二にそれぞれの章が基礎知識から高度な理論の展開まで明解に記述されていることである。第三に先行研究の結果を評価しながらも、その成果のどの部分を自分の論文に生かしたかを明示していることである。第四にこれは特に第 6 章に典型的であるが、問題解決のために参考資料を渉猟し解決するまで考察を持続したことである。

以上、横山昌子氏の博士学位論文を精査し、博士学位論文審査口頭試問委員会における審査委員各位の評価、質疑応答の内容に鑑み、また学位論文公聴会における横山昌子氏の真摯な研究発表およびその後の活発な議論を参考にして審査した結果、横山昌子氏のこの論文が博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有すると判定した。